学道一如

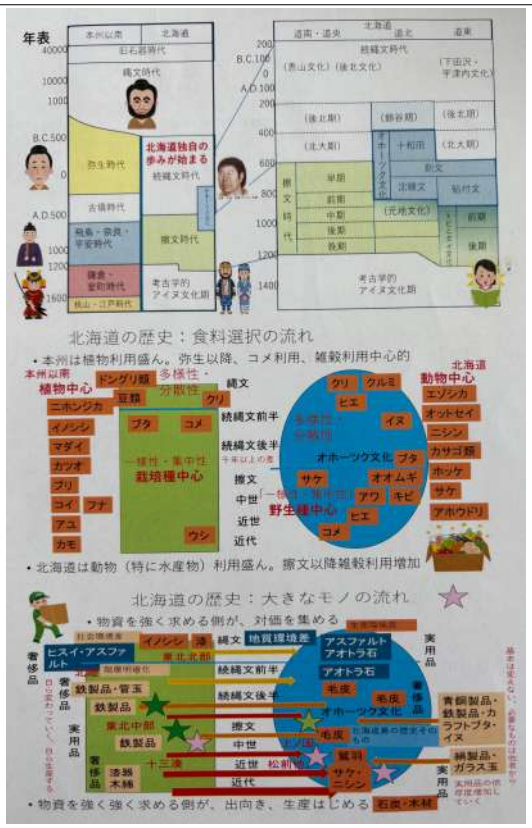
発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2024年12月23日
第52号

小樽再発見⑰ 考古学から俯瞰する 北海道と本州の差を活かす暮らし

連続講座「北海道の自然・歴史が形作った小樽を考える」（似鳥文化財団主催）第4回は「考古学から北海道を俯瞰する」と題し、福井淳一氏（（公財）北海道埋蔵文化財センター）が講演された。北海道と本州の違いを気候、ヒトの流れ、食料、交易などから考古学の知見により分析、提示された。北海道では本州との差を活かして暮らしてきたことが明らかになった。

左図（上）に示されるように北海道には独自のヒトの歩みの歴史がある。それは気温、降雪、海流の影響によるもので、食料（左図中）は海産物など狩猟が主流であった。やがて本州との交易が進み、金属器が流入（左図下）。北海道からはアザラシの毛皮やニシン、サケが大量に渡った。物資を強く求める側（本州）が対価を集めた。

サケ利用の歴史を考古学の見地から検証したところ、サケは産卵地環境の安定が必要で、地形発達や気候変動によって、資源量に大きな影響を受け、安定的な水産資源ではないことが明らかになった。考古学のエビデンスが仮説を裏付ける醍醐味が示された。



年表、食料選択、モノの流れを本州と比較すると違いが明らかになる。

オトポール事件
ユダヤ人を救ったもう一人の日本人
樋口季一郎氏

さて、皆さんは日本人とユダヤ人の関わりについて聞かれたら何と答えますか。おそらく一番多いのは、リトアニア領事代理の杉原千畝でしょう。一九四〇年、彼は独断でビザを発行し、数千人のユダヤ人を助けました。実は彼より二年前に数千人のユダヤ人を助けた人物がいたのです。今回はその軍人樋口季一郎陸軍中将（左写真）について説明させていただきます。

■略歴

まずは樋口中将の略歴です。一八八八年兵庫県生まれ。一九〇九年陸軍士官学校を卒業。一九一九年シベリア出兵に参加する他、東欧各地に駐在武官として赴任、陸軍きってのロシア通として知られる。一九四二年から北部軍司令官として指揮した。

■なぜユダヤ人を救ったか

ではなぜ樋口中将はユダヤ人を助けようと思ったのでしょうか。それは彼が東欧出張の際、

つきさっぷ郷土資料館（北部軍司令官官邸）
樋口氏は第二代司令官

宿を求めたところ、東洋人であることを理由に断られたのですが、ユダヤ人の一家が貧しいにもかかわらず温かく受け入れ精一杯もてなしてくれた経験があったからです。こうしてユダヤ人に好印象を持ち、後にユダヤ人を助けたと言われています。

では彼はどのようにユダヤ人を救ったのでしょうか。一九三八年三月、当時ドイツではヒトラー率いるナチスが台頭し、ユダヤ人を迫害していました。迫害から逃れた一部のユダヤ人はポーランド、ソ連を通り、満州国とソ連の国境オトポールまでやってきました。彼らは満州国を通り上海に行こうとしていました。しかし、満州国外交部はドイツとの関係を考え、彼らの入国を渋り、マイナス30度の中、足止めされてしまいました。それを聞いた樋口中将は独断で満州国外交部に入国を許可するよう指示し、満州鉄道総裁に掛け合い、護送列車を要請し承諾を得ました。列車でユダヤ人を移送し、臨時の収容先で温かい食事を用意させ、ユダヤ人の身も心も温めたのです。この樋口中将の決断力が多くのユダヤ人を救いました。

■軍上層部に正当性を主張

しかし、この出来事がドイツに伝わり、ドイツの駐日大使から正式に抗議を受けます。抗議書は陸軍に回され、外務省・陸軍内部では樋口中将の決断を問題視する声が相次ぎました。

これに対し彼は満州国の関東軍司令部に反論を込めた手紙を送りました。すると司令部に出頭を求められ、事実上の査問会が行われました。樋口中将と対面したのは、関東軍参謀長東條英機でした。席上、樋口中将は「日本も満州もドイツの非人道的国策に屈すべきではない」と自らの正当性を主張し、さらに東條に対して「ヒトラーの行動が正しいか」と問いただしました。東條は冷徹な男で、カミソリ東條と言われていましたが、合理的な一面があり、筋の通る話には理解を示しました。そのため、この問題を不問に付し、ドイツの抗議を「人道上の配慮で行ったもの」として一蹴し事なきを得ました。

■ユダヤ人が助命懇願

この話には後日談があります。一九四五年終戦直後、日本に不当に侵攻を始めたソ連赤軍に対し、樋口中将が反撃を指示し、大損害を与えたため、ソ連から戦犯指名を受けてしまいました。すると、米国に渡り樋口氏に助命されたユダヤ人が、米国政府に彼の助命を懇願し、ＧＨＱがソ連の要求を拒否したのです。

以上が樋口中将がユダヤ人を助けた「オトポール事件」の概要です。ではまた次回お会いしましょう。

双葉歴史探偵事務所
□3□